

くらしと協同の本

藻谷浩介著 NHK 広島取材班

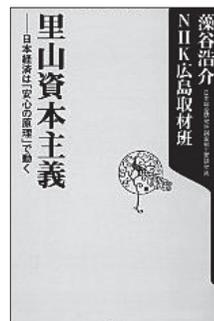
『里山資本主義
—日本経済は「安心の原理」で動く』

【BookData】

発行 角川書店 2013年7月 308ページ

値段 780円 + 税

ISBN : 978-4-04-110512-2



評者：高田 晋史 (京都府立大学大学院生命環境科学研究科応用生命科学専攻農業経営学研究室)

資本主義は発展とともに形態を変化させる。産業主導の資本主義は、生産性を向上させて利益を得ようとする仕組みであり、それにより私達の生活は一定程度豊かになった。やがて、資本の蓄積が進むと、それらの資本は投資や運用へ向けられるようになり、金融主導の資本主義いわゆるマネー資本主義が登場する。マネー資本主義とは、株価の変動などによって利益を得ようとする仕組みであり、その変動は人々の期待値などに左右されるため、社会は非常に不安定になる。今日ではリーマン・ショックをきっかけにマネー資本主義社会への不安が高まっており、それに代わる新たなシステムの模索が続けられている。

評者は今年の8月まで中国四川省成都市に4年間滞在していたが、茶館やカフェでマネーゲーム、不動産取引に勤しんでいる人を日常的に見てきた。その一方で、ふと外に目をやると出稼ぎ労働者が長時間過酷な環境で働いている。彼らは金持ちの何倍も働きながら得る収入は僅かである。この社会では、何らかの要因でまとまったお金や資産を持った人とそうでない人とで全く異なる運命にある。当時、評者の周りにもマネーゲームをしている人は多く、専門知識の有無に関わらず手軽にゲーム感覚で行っ

ている光景に違和感を感じる時もあった。

前置きが長くなったが、本書はこうしたマネー資本主義に対抗し、マネーと距離を置く(マネー資本主義の影響をうまくコントロールする)生活を提唱したものである。全体の構成としては、岡山県真庭市や広島県庄原市をはじめとする中国地方やオーストリアの事例をNHK取材班2名が詳細な取材を基に紹介し、それらの事例をベストセラー『デフレの正体』の著者である藻谷浩介氏が総括するというものになっている。

本書の内容や方向性そのものは、評者の研究分野でよく言及されてきたことであり、それほど新しいものではない。ただ、何とんでも「里山資本主義」というインパクトのある名称に魅かれる。里山とは人の手が入ることで維持されてきた自然であり、長年自然と深い結び付きを維持してきた日本人を体現する言葉である。里山概念は研究者によって様々であるが、本書でいう里山とは農山村そのものを指している。こうした、里山という言葉を用いたところに筆者らが本書で試みようとしたことが見えてくる。筆者らは里山資本主義を、マネー資本主義のアンチテーゼやバックアップシステムとしてだけで提唱したのではない。里山を中心とした

従来のライフスタイルを見直すことで、日本人らしい豊かな生活とは何かを考え、これまでの経済システムにお金では計れない里山本来の豊かさを付け加えていくことで、日本人らしく生活していける社会を考えてみようとしたものである。

第一章と第二章で紹介されている岡山県真庭市とオーストリアにおけるバイオマス発電の事例で重要なのは、こうした地域では長年里山の維持管理がされてきたことである。里山は常に維持管理という人間の働きかけが必要であり、それによって利用価値を持つ。このことは里山資本主義的な投資であり、その収益の中にはお金だけでなく、安定、安心、やりがいというものも含まれる。また、これらの事例から里山資本主義の実践には、地域をまとめるキーパーソンの存在や行政からの強力なバックアップが非常に重要であることが見てとれる。里山資本主義の実践に限らず、地域活性化を実現していくためには地域が一体となった取り組みが必要であり、そのためには住民達の決断力や行動力、行政のリーダーシップが重要である。ただ、現状では全ての地域が里山資本主義を実践するのは難しく、里山資本主義を他の地域に広めていくためには何が必要であり、何が課題となるのか、筆者らなりの考えが明確に示されておればよりその議論に現実味が出てくるであろう。

この他、本書で紹介されている様々な事例から見えてくることは、里山資本主義の社会における各事業体はお金儲けを必ずしも主眼とせず、それぞれの哲学や理想を追求するために事業活動を行っていることである。したがって、里山資本主義の実践者はやりがいを感じながら事業活動に取り組み、消費者に媚びることもない。また、それぞれの事業主体は地域内に様々なネットワークを持っており、この結果、経済規模は小さいながらも地域内に多様な経済循環が生まれ、地域社会が元気になっていく。こ

のことは里山資本主義的な配当であり、里山にある多様なものを活用する代わりに収益を里山に還元するというものである。ここで還元されるものはお金だけでなく、住民の生きがいや楽しさ、人間関係の構築など多様なものが含まれる。

本書はマネー資本主義が幅を利かせている社会において、多くの人達が内心感じてきた疑問や考えを里山資本主義という概念を用いて表現したものであり、共感を覚える読者も多いのではないかと考える。また、難解な専門用語や表現はほとんどなく、専門的な知識がなくても気軽に読むことができ、それがまた多くの読者を引きつけている所以であろう。そして、本書を読んでいくうちに自分達がいかにマネー中毒に陥っているかを実感したり、常識と思っていたことが覆されることで爽快感を感じたりする読者もいるかもしれない。

最後にあえて本書の弱点を明記しておくとするれば、里山資本主義に関する具体的なシステムや理論的枠組みについて詳細な言及がなされていないことである。ともすれば、これは読者自身が本書を読み進めていく上でそれぞれイメージすべきなのかもしれない。あるいは、里山資本主義の取り組み自体が多様なものであり、それらを普遍化すること自体が里山資本主義的とはいえないのかもしれない。また、最終総括では一部根拠があいまいなまま里山資本主義への期待が述べられている部分があり、少し話が大きくなりすぎている。ただ、それも筆者らの里山資本主義に懸ける熱い思いの表れと受け取ることもできる。いずれにせよ、本書は里山資本主義という新しい概念を用いて現代社会への問題提起を行ったという点で大いに評価されるべきであり、評者のような地域研究に関わる者や地域づくりの実践者などにとっては非常に参考になることはもちろん、マネー資本主義の中で活躍している企業家やビジネスマンなどに薦めてみたい一冊である。